

## 第3章 旭川におけるアイヌの家族形成と展開

品川ひろみ

札幌国際大学人文学部教授

### はじめに

本章ではアイヌの人々の生活を、現在と過去の生活経験をふまえ家族という視点から明らかにする。われわれ研究グループでは、これまでアイヌの人々が多く生活する北海道内の6つの地域において、同様の調査を行っており、本調査はその延長線上にある。

そこでは、現代のアイヌの家族や生活において、アイヌの血筋の濃さやアイヌ文化の経験の有無は、地域によって違いがあること、また地域による違い以上に性別による経験の違いが大きいことが明らかになった。なかでも家族形成のスタートといえる結婚においては、男性よりも女性においてアイヌであることの影響が見られた。さらに子ども世代に対するアイヌ文化の継承については、親の意識や経験に加え、現在の環境のなかにアイヌ文化に触れる機会があるかどうか、つまり地域の環境が影響していることが示唆された（品川 2018）。

今回の対象地域である旭川は、アイヌの人々にとって「場所請負制」からはじまる同化政策の長く厳しい歴史があった地域である。しかしこの地域では、そのような中にあっても、アイヌ文化の担い手たちの努力によって、民族文化の中核的部分は今日に至るまで伝承されてきていると言われている。旭川市アイヌ文化振興計画によれば、その根拠として、①「旭川チカップニアイヌ民族文化保存会」②「旭川アイヌ語教室」③「川村カ子トアイヌ記念館」の存在をあげているが、他方で伝承者が少なく高齢化が進んでいることを課題としている。

平成29年の「北海道アイヌ生活実態調査」では、対象となった上川のアイヌは38世帯84人であった。北海道アイヌ生活実態調査は、ほぼ7年に1度の割合で行ってきたが、平成29年の調査は4年の間隔で行っている。前回対象となったアイヌは46世帯108人であったので、世帯数では8世帯、人数では24人ほど少なくなっている。

このような、対象者であるアイヌの人々の減少や高齢化は、アイヌの家族にとって少なからず影響があるだろう。また旭川に伝承されている文化は、アイヌの人々の家族の生活に何かしらの影響があるのだろうか。

本章ではそれらについて、子どもの頃の生活や経験（第2節）、新しい家族を形成する過程である結婚（第3節）、子ども世代への継承（第4節）、アイヌ家族における和人（第5節）の4つの視点から明らかにしていく。

### 第1節 対象者の概要

#### 第1項 年齢層と世帯の状況

本稿で対象とするのは、インタビューに協力してくれた、男性5名、女性9名の14名の方々である。年齢層は30代以下の青年層が1名、40代、50代の壮年層が3名、60代以降の老年層が10名と、

高齢の方が多い。現在同居している家族構成について見ると、14名のうちおよそ半数の6名が1人暮らしである。しかしそのうちの4人は、旭川市内に子どもが居住している。2人で生活している者は3名であるが、そのうち、夫婦で生活しているのは1名だけで、他は子どもとの2人暮らしである<sup>1)</sup>。ほかには、3人家族が1名、4人家族が3名、5人家族が1名となっている。

表3-1 年齢・性別対象者

|    |     | 対象者 |    |
|----|-----|-----|----|
|    |     | 男性  | 女性 |
| 実数 | 青年層 | 1   | 0  |
|    | 壮年層 | 1   | 2  |
|    | 老年層 | 3   | 7  |
|    | 合計  | 5   | 9  |

表3-2 世帯規模

|    | 実数 |
|----|----|
| 1人 | 6  |
| 2人 | 3  |
| 3人 | 1  |
| 4人 | 3  |
| 5人 | 1  |
| 合計 | 14 |

## 第2項 アイヌの血筋

対象者がアイヌの血筋であるか否かについて、アイヌの血筋であると答えたものは11名で、アイヌの血筋ではないものが3名であった。その3名はすべて和人配偶者であった。

アイヌであると答えた11名のうち、父母祖父母ともにアイヌと答えた者は3名だけだった。3名の血筋をさらに上の世代まで確認すると、父母祖父母さらにその上の曾祖父母の4世代がアイヌという、いわば4世代「純血」アイヌであることがわかった。

ただしこの3人のなかには、きょうだいが含まれていたため、世代の純粹性を示す表3-5では若い年齢の者1名のみをカウントし2名という表記にしている。

対象者のなかにはそれ以外に3世代「純血」アイヌはみられず、父母のみアイヌであるとする者も2名のみと、父親か母親のどちらかがアイヌであるとする者が全体の半数近い<sup>2)</sup>。

それでは、このような現状の家族がどのようにして形成されてきたのか、幼いころの生活の中から確認していこう。

表3-3 対象者の血統

|      | 対象者の血統 | 配偶者の血統 |
|------|--------|--------|
|      | 実数     | 実数     |
| アイヌ  | 11     | 4      |
| 非アイヌ | 3      | 10     |
| 合計   | 14     | 14     |

表3-4 アイヌの血統

| 純血性        | 実数 |
|------------|----|
| 父母祖父母ともアイヌ | 3  |
| 父母のみアイヌ    | 2  |
| 父のみアイヌ     | 1  |
| 母のみアイヌ     | 5  |
| 父母とも和人     | 3  |
| 計          | 14 |

表3-5 純血性・世代

|            | 実数 |
|------------|----|
| 3世代「純血」アイヌ | 0  |
| 4世代「純血」アイヌ | 2  |

## 第2節 子どもの頃の生活

子ども時代にどのような家族の生活を経験してきたのだろうか。またそれはアイヌとしての生活として、他の北海道内の地域と比べ何か特徴的な点があるのだろうか<sup>3)</sup>。

子どもの頃はどのような暮らしでしたかという問いで多く述べられていたのは、家がアイヌ民芸品制作やアイヌ観光に携わっていたとするものである。

## 第1項 熊彫り

対象者が子どもの頃どのような生活をしてきたのかというエピソードのなかには、アイヌの生活が身近だったという者が多くみられる。その理由の一つとして、自分の家が「木彫り」「熊彫り」をしていたとするものが少なくない。アイヌ11名のなかで5名と、半数近い者が、家業や親の内職が木彫りだったと述べていた。

とくに木彫りを生業とする場合、作品を制作するだけか、販売もするのかによって必要な工程は異なる。今回は5名中4名が、作品を制作するばかりでなく、それを販売したり、あるいは民芸品の店舗を経営していたとするものだった。さらに、自分の家の手伝いばかりでなく、他の地域の「知り合い」の店を手伝いに行ったという経験を持つ者も見られた。

- ・うちの母親が木彫りをやっていたり、箸を作っていたり、内職でやっていただけですね。母親の兄弟ももう亡くなっていて、うちのお母さんしかいないんですけど、お兄さんはね、それこそ熊とか彫っていましたね。伯父は熊を彫って、それで生活していましたね。（壮年層・女性）
- ・両親は木彫りをしていた。母親はそれに毛並みつけるように、木彫りだから、必ず。それやったり、刺繍をしていたのかな。でも、あんまり記憶にないけれど。（老年層・女性）
- ・母も父も木彫りです。アクセサリーとかね、父親は熊彫り。中略…彫りもそうだしね、小学校の頃、親と一緒に連れられて阿寒湖。土産品売場の店頭にいたから、その時よそのおばあちゃんだけど、刺繍をしているところをずっと見ていて、小学校1, 2年生。そこでまねごとみたいにさせてもらったりとか。あとはもう家業がそういうのだったから、小学校5, 6年生から手伝いをしているから、中学校を卒業するまで。卒業してから民芸品の売店を持たされて。そこでも実演販売。あとは物産展、〇〇を回る。13年くらい。シーズンは川村記念館の売店で、シーズン中は。そこで売店を持っていましたから。冬になると物産展。10月くらい入ってから春までね。物産展回りですね。（老年層・女性）

このように木彫りや熊彫りが多いのは、旭川がアイヌ民芸品としての「木彫り熊」の源流の一つと言われていることが考えられる<sup>4)</sup>。また、作品を販売するルートとして、旭川市内ばかりでなく、層雲峡や阿寒湖、洞爺湖さらには全国の北海道物産展での販売などを有していたことがあるだろう。このように旭川では、親が家で熊を彫っていることや、店での販売を通してアイヌの文化に日常的に触れていたとする経験をもつ者が多い。

## 第2項 アイヌ民族舞踊

アイヌとしての生活のなかで、次に多かったのはアイヌ舞踊の経験である。これまで、札幌、むかわ、伊達、新ひだか、白糠、帯広などの地域においても、アイヌ舞踊への関わりを確認することができた。ただし他の地域と異なるのは、アイヌ舞踊の伝達を目的としたものというより、観光業としてアイヌ記念館<sup>5)</sup>で、親や祖母などが踊っていたことを見てきた、あるいはそのための練習に同行していたという経験である。親が記念館の踊りに参加していることで、自分自身がアイヌであると知った者もいた。

- ・昔ねー、それこそ記念館最高ブームの時は、うちのお袋も踊りに行ったりとかしたし、ね、あるいは観光客来るから頼めるかーい、でさ。（老年層・男性）
- ・窓口がやっぱり記念館だから、記念館にそういう仕事が入ってくると誰々何人で誰と誰が来てくれるかな、行けないっていう人もいれば、行けるよっていう人を集めて。まあ8人から9人くらい最低でも。それで行って踊ってくる。（老年層・女性）
- ・気づいたのだったら、中学校に入ってからかな。中略…母親が踊りに行っていたのね。何でやっていたのかはわからなかったの。それで、何かで言われたんだったかな。あなたのお母さん、アイヌとか何とか（それでアイヌであることを知った）。（老年層・女性）

このようにアイヌの踊りを披露する記念館があることによって、子ども世代のアイヌとしての生活経験が創られていった側面をもつ。また、これらのことを見て、自分自身や自分の子どもがアイヌであることを「気づかされる」「自然に知った」とする者も少なくない。

これらのことから、一般に開かれたアイヌ記念館があることによって、アイヌの人々の経済的な収入の場という側面ばかりでなく、家族のあり方やアイヌとしてのアイデンティティの形成にも少なからず影響しているといえるだろう。

### 第3項 家庭内の生活

家業として木彫りやアイヌ舞踊を通して、アイヌ文化に触れることが多いことを確認した。では、それ以外に家庭のなかでアイヌの文化に触れる経験はあったのだろうか。

#### （1）儀式

家庭のなかで、家業としての木彫りに接することで、アイヌであると気づかされた者が多い一方で、カムイノミなどの伝統儀式を行っていたとする者はそれほど多くはない。ただし詳細に聞くと、生活の端々にアイヌの文化が息づいていたことにも気づかされる。

さらに、子どもの頃に熊を飼っていたとする者もいた。その熊をどのような経緯で飼っていたのかについては語られなかったが、自分の家で熊を飼っている経験をもつ者が複数みられたのは、その時代、この地域においてそれらの伝統文化が維持されていたといえる。

また、アイヌのさまざまな宝物についても、かつては自宅にあったとする者もいた。それらについては、「誰かが売ってしまった」「記念館にある」とする。

- ・熊は飼ってた。一緒にミルク飲んでたことある。小熊が、うん。うちのばあちゃんが飼ってて、一緒に、うん。写真ありますね。（壮年層・男性）
- ・うーん、なんとなく父親がやってたなあっていうのは覚えてますね（青年層・男性）
- ・うちの親は普通に、うちのね、たとえば、こうストーブでも何でも水でも何でも、それはやってたよ、親父はね。（老年層・男性）
- ・宝物。うちの母親が資料館みたいのを作ったの。そこにはいろいろなものがあつた。中略…中のものは全部アイヌ協会に、あれは、寄付したのかな。そこらへん、ちょっとあんまり覚えていない、話したことないから。（老年層・女性）

## (2) アイヌ語

子どもの頃の生活を振り返ってもらくと、周囲でアイヌ語を話していたことを記憶している者が多い。老年層では親世代でもアイヌ語を話していたとする者や、壮年層では祖父母などがアイヌ語を使っていたという者がみられる。

- ・アイヌ語をしゃべっていましたね。フチ（おばあさん）たちが集まったらみんな、そうやってしゃべったり、歌ったり、なんかしていたり、やっているのは見てましたね。（老年層・女性）
- ・隣近所の明治生まれのばあちゃんたちいたからよくみんな集まって。ござを編んだり、それでおしゃべりして。3人で話してる時はアイヌ語なんだけど、（学校から帰って）「ただいまー」って言うとピタッとアイヌ語やめちゃって日本語で話す。（老年層・女性）
- ・うーんとね。小さい頃ってのね、たとえば、うちの親は夫婦喧嘩はこれ（アイヌ語）だからね。（老年層・男性）

このように幼い頃の家庭の様子を見ると、アイヌとしての生活が日常のなかにあったとする者が多いことがわかる。今回の対象者は老年層が多いことが、これらの豊かな経験の背景にあると思われる。

表3-6 幼い頃の生活

|                                                                                                                  |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ・両親は木彫り/土産売りの店頭にいた。小さい時から（アイヌであることを）自覚していました。                                                                    |
| ・親が民芸品店をやったので、手伝いをした。冬はアルバイトをした。                                                                                 |
| ・そういう話は聞かされたことはないですね。母親が内職で木彫りをしていた。                                                                             |
| ・暮らしぶりは普通だった。（和人）                                                                                                |
| ・両親は木彫りをしていた母親はそれに毛並みつけるように、木彫りだから、必ず。それやったり、刺繍をしていたのかな。でも、あんまり記憶にないけれど。母親も小学生の頃だったかな。                           |
| ・ごく普通だと思う。                                                                                                       |
| ・苦労したことはない。（和人）                                                                                                  |
| ・（親は）再婚同士家庭。カムイノミのようなことはしえいた。夫婦喧嘩はアイヌ語をつかっていた。祖母は入れ墨をしていた。母親内職で熊彫りをしていた。                                         |
| ・隣近所の明治生まれのばあちゃんたちいたからよくみんな集まって。ござを編んだり、それでおしゃべりして。3人で話してる時はアイヌ語なんだけど、（学校から帰って）「ただいまー」って言うとピタッとアイヌ語やめちゃって日本語で話す。 |
| ・（祖母がアイヌ語を）喋ってなんか教えていましたね。家にも（伝統的なものが）いっぱいありましたね。熊はかっていた。                                                        |
| ・ニンカリは昔みたことがありますね。すぐそばにいたおばあちゃんです。アイヌ語は例えばお金のことをイコロといったり、後何かちらちらと、あるんですね。でもそれはそんな、ほんとに隠語的なそんなにたくさんじゃないんです。       |
| ・ばあちゃん、母親みんなアイヌ語使える、親はね、親からばあちゃん爺さんまで。                                                                           |
| ・1〜2歳の頃に父親の仕事の都合で樺太にわたり終戦まで過ごした。樺太にはアイヌはおらずアイヌの儀式などしたことがなかったのでアイヌの生活をまったくしなかった。                                  |
| ・普通の家より少し良かったかもしれない。（和人）                                                                                         |

## 第3節 結婚について

前述するような経験をした者が、生まれ育つ家庭から自らの家庭を築くまでには、どのような経緯を経ているのだろうか。アイヌの人々の結婚については、これまでの調査でも厳しい経験をもつ方々が多かった。性別や年代で異なる傾向はあるものの、アイヌであることを隠すことを余

儀なくされたり、アイヌであるために苦労したとする者も少なくなく、離別の経験も多いことが明らかになっている（品川 2018）。今回の対象者である14名はすべて既婚者であり結婚経験をもっている。その中で離別の経験をもつものは4名であり、すべて女性であった。

表3-7 婚姻状況

|    |    | 男性 | 女性 |
|----|----|----|----|
| 実数 | 未婚 | 0  | 0  |
|    | 既婚 | 4  | 3  |
|    | 離別 | 0  | 4  |
|    | 死別 | 1  | 2  |
|    | 再婚 | 0  | 0  |
|    | 合計 | 5  | 9  |

### 第1項 結婚の経緯

結婚に関するエピソードをみてみよう。どのようなきっかけで結婚に至ったのかについては、様々であるが、ここで注目されるのは、アイヌの民芸品店や物産展、アイヌ記念館などを通じて知り合ったというものが複数いることである。その際、配偶者となった人は、必ずしもアイヌではない。アイヌの民芸に関心をもつ和人であったという例もある。

- ・出会ったのは、18, 9歳くらいで、出会っていると思います。物産展で。広島。岡山、広島、倉敷、そっちのほうに12年くらい行っていましたから。4店舗。天満屋というデパートがあって、そごうとか。高島屋、東京のね。いろいろ行っていますよ。そういう時に出会っているんです。（老年層・女性）
- ・夏休みに売店のお手伝いとかしてて、その時に（相手が旅行にきていて）知り合った。（老年層・女性）
- ・旅行先で民芸品店で、彫刻を介して知り合った。（老年層・男性）
- ・（アイヌ）記念館を辞める時に知り合った。（老年層・女性）

表3-8 結婚の契機

|                                                                                |
|--------------------------------------------------------------------------------|
| ・物産展で出会った。                                                                     |
| ・アルバイト先の飲食店で夫とであった。                                                            |
| ・友だちと飲みに行き知り合った。                                                               |
| ・旅行先で民芸品店で、彫刻を介して知りあった。                                                        |
| ・うちの母親だとか、叔父さんたちが好きで出入りしていた人なんだよね。だから、なんだろうね。うちの母親が気に入って、あんた、あの人と一緒にいなさいと言うから。 |
| ・学生時代からの同級生。                                                                   |
| ・不明。                                                                           |
| ・不明。                                                                           |
| ・夏休みに売店のお手伝いとかしてて、その時に（相手が旅行にきていて）知り合った。                                       |
| 旭川で出会った。                                                                       |
| ・不明。                                                                           |
| ・東京で知り合い、結婚を機に旭川に戻った。                                                          |
| ・見合いをして結婚した。                                                                   |
| ・記念館を辞める時に知り合った。相手から電話がかかってきて付き合うようになり、結婚した。                                   |

## 第2項 民族性

配偶者の血筋をみると、自身がアイヌで、配偶者もアイヌであるとするものは、男女合わせて2名だけである。もっとも多いのは、自身はアイヌであるが配偶者は和人であるとする者である。男性の3名、女性の6名がそれにあたる。残りの男性1名、女性2名は自身が和人配偶者である。

つまり、今回の対象者の14名のうち12名は、アイヌと和人との結婚である。では、そのような中で結婚はいかなるものであったのだろうか。

本調査において、結婚時にアイヌであることを理由に「困難」なことがあったとする者は多くはない。明確に反対されたものは1名、多少問題になったとする者も1名だけである。しかし、現在の配偶者との結婚は影響していないが、結婚前に付き合った人とは苦い思い出をもつ者もいる。

- ・ 十分反対されましたよ。旦那のほう。はい。うちのほうは熊彫りとは一緒になってはいかんと言われました。将来がないから。アイヌだからだめだということでしょ、ちゃんとしたところからもらうということで、そのちゃんとしたところはどこからなんだかわからないけど。アイヌじゃない子をもらいたいということだったんでしょう。（アイヌ・老年）
- ・ 一応（民族性も問題になった）。年が離れていたこともあり、うちの親も反対して、向こうの親も反対して。（アイヌ・壮年）
- ・ 結婚前に付き合った人は、相手の親に身を引いてくれと言われた。今の相手は、人をあんましバカにしない。「アイヌ」って来たら「えっ、何それ」くらいのね。親も職場にもアイヌの人が行っていて（知っていたこともあるからか）「バカにするようなもんでないんだぞー」って言っていたと。（アイヌ・老年）

このように全体としては多くないが、結婚に反対された理由としてアイヌであることが問題の要因としてあったことが述べられていた。

## 第3項 アイヌであることの意識と影響

しかしインタビューにおいて目立っていたのは、「アイヌであるという民族性は意識しなかった」し「実際に影響もしなかった」とするものである。ただし、アイヌであることを「気にしない」としても、民族性についてまったく意識していないということではない。分かりやすく述べるとすれば、アイヌであることは「気にしない」と言っても許されるような相手を選んで付き合っている側面はあるだろう。しかし、そのような相手だとしても、結婚するとなれば、そのまま相手やその親に告げないわけにはいかない。ある壮年の女性は、自分では言わなかったが「母親が相手の親に伝えたかもしれない」と言う。一般に同じ民族同士である場合は、あえて自分は「和人」とであると伝えたり確かめることをすることはない。この母親はアイヌであるがゆえに、娘の血筋のことを告げる必要を感じていたといえるだろう。

なかには、付き合った時には自分がアイヌであることを告げなかったが、いざ結婚を決めた時に自分がアイヌであることを伝えたところ、お互いがアイヌであることを知り、驚いたという者もいる。

- ・いや、まったく。そういうのは気にしたことなかったけど、母親がやっぱりうちの旦那の実家に結婚する時にそういうことを話したらしんですよ。私は全然しらなかったんだけど。でもうちの旦那もそういう話聞いたことないみたいな話もしていたから、親同士で話をしたのか、どうかその辺は。ちょっともう向こうの両親も亡くなっちゃったからわからないんだけど。何かそういう話はしたということは聞いたことがありますね。（壮年層・女性）
- ・まったくないですね。そのこと（アイヌであること）後から聞いて「えっ」てなった。お互いふたりで。（壮年層・男性）

このように、今回のインタビューにおいて和人と結婚したアイヌたちは、結婚の際に自分や相手が民族性を問題にすることは比較的少数であった。

表3-9 民族性を意識したか

|                                                                                                                                                          |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ・十分反対されましたよ。〇〇のほう、はい。うちのほうは熊彫とは一緒になってはいかんと言われました。将来がないから。アイヌだからだめだということでしょ、ちゃんとしたところからもらうということで、そのちゃんとしたところはどこからなんだかわからないけど。アイヌじゃない子をもらいたいということだったんでしょう。 |
| ・結婚で（アイヌであることで）苦労することはなかった。                                                                                                                              |
| ・自分も相手も気にしたことはなかった。                                                                                                                                      |
| ・うん。なかったよ。なかったけれど、やっぱりある友だちからは、職場でもあの人はアイヌの女のひとと一緒にいるとはね。                                                                                                |
| ・考慮することはなかった。                                                                                                                                            |
| ・民族性を考慮することは全くなかった。                                                                                                                                      |
| ・しない。あなたがいいんだら、しょうがないねって。心配はしていたと思う。                                                                                                                     |
| ・（今のひととは）結婚前に付き合った人は、相手の親に身を引いてくれと言われた。今の相手は、人をあんましバカにしない「アイヌ」って来たら「えっ、何それ」くらいのね。親も職場にもあアイヌの人が行っていて（知っていたこともあるから）「バカにするようなもんでないんだぞー」って言っていたよ。            |
| ・自分の方から「アイヌなんですよ」って先にお父さんとお母さんに（伝えた）。東京の人だから特別何とも思わないし。中略・・・お母さんに一番かわいがってもらった。                                                                           |
| ・全くないですね。                                                                                                                                                |
| そのこと（アイヌであること）後から聞いて「えっ」てなった。お互いふたりで。                                                                                                                    |
| ・元夫にはそれだけは言わなきゃいけないと思って。それでは結婚するときにちょっと気になっていましたね。                                                                                                       |
| ・相手が自分がアイヌであることは知っていたが「全然」相手の親も「もう全然関係ない」                                                                                                                |
| ・結婚の時よりも、結婚してからアイヌであることを意識した。                                                                                                                            |
| ・意識したことはない。                                                                                                                                              |

#### 第4項 アイヌの血筋の継承

和人と結婚したアイヌ9名のなかには、本人が父母祖父母ともにアイヌだとする者がいた。かれらは曾祖父母まですべてアイヌという、4世代「純血」アイヌである。彼らは結婚の時、自分や相手の民族性についてどのように考えていたのだろうか。それでは改めて出会いの契機をみてみよう。

- ・出会ったのは、18, 9歳くらいで、出会っていると思います。物産展で。天満屋というデパートがあって、そごうとか。高島屋、東京のね。いろいろ行っていますよ。そういう時に出会っているんです。中略・・・その当時は旭川物産展ね。今みたいに北海道物産展ではないのね、旭川とか函館とか、昔はあちこちから頼まれるんです。（老年層・女性：再掲）

- ・夏休みに売店（層雲峡）のお手伝いとかしてて、その時に（相手が旅行にきていて）知り合った。その頃すごい儲かってた。バスが止まってお客さんがバーッと来て。私も小学校の頃はそこへ行って踊り踊ってお客さんに見せたり、なんだかんだやって。お金もらってはいないけども、多分親たちは少しはもらってたのかな。それでそこで泊まり込みで働いて、夏休み中にいて。（老年層・女性）

3名とも配偶者は道外の出身である。また2名はアイヌの物産展で働く中で出会っている。さらにそのうちの1名は、相手は和人でありながら熊彫りを仕事としているということであった。ではこの4世代アイヌの血筋が継承されている人たちも、自分自身や家族の民族性について考慮することなかったのだろうか。3名のうち、アイヌであることによって結婚を明確に反対されたとするものは、先ほどもみた1名だけである。

- ・十分反対されましたよ。旦那のほう。アイヌだからだめだということでしょ、ちゃんとしたところからもらうということで、そのちゃんとしたところはどこからなんだかわからないけど。アイヌじゃない子をもらいたいということだったんでしょう。（老年層・女性：再掲）

また、自分の実家では、「うちのほうは熊彫りとは一緒になってはいかんと言われました。将来がないから。」と反対されたという。それは、和人だから反対という民族性の問題ではなく、経済的な問題が反対する根拠としてあるようだ。

残りの2名については、

- ・いや全然東京の人だから特別何とも思わないし、旦那のお兄さんも北海道の女の人と結婚してたから、「北海道の嫁さんが来る」っていうぐらいで。で、自分の方から、「アイヌなんですよ」って先にもうお父さんとお母さんに（伝えた）。東京の人だから特別何とも思わないし。中略・・・お母さんに一番かわいがってもらった。（老年層・女性）
- ・相手が自分がアイヌであることは知っていたが全然（問題にならなかった）。相手の親も「もう全然関係ない」（老年層・男性）

この3名は曾祖父母までアイヌであり血筋が濃いだけでなく、子どもの頃からアイヌ文化の経験も十分にある。しかし、このように、アイヌの血筋や文化を受けついでいたとしても、結婚の際にアイヌの血筋が「薄まる」との躊躇などはみられない。さらに言えば、意図的に「薄める」という考えもない。つまり4世代「純血」アイヌであっても、一般と同様、結婚に際して民族性については考慮することなく配偶者を選んでいるといえよう。

表3-10 血統別婚姻状況

|    |              | 男性 | 女性 | 合計 |
|----|--------------|----|----|----|
| 実数 | アイヌ配偶者を持つアイヌ | 1  | 1  | 2  |
|    | 和人配偶者を持つアイヌ  | 3  | 6  | 9  |
|    | 未婚アイヌ        | 0  | 0  | 0  |
|    | 和人配偶者        | 1  | 2  | 3  |
|    | 合計           | 5  | 9  | 14 |

#### 第5項 離別経験

アイヌの人々のなかには、とくに女性において離別経験をもつ者が多いことがこれまでの調査で分かっている。今回調査に協力してくれた14名はすべて結婚の経験をもっているが、その中で離婚をしている者は4名である。離婚の詳細なエピソードは確認できないが、それらの方々の民族の組み合わせを見ると、和人配偶者をもつアイヌが3名とアイヌ配偶者をもつ和人が1名であった。

- ・そう…そうです。〇〇ってとこに家を建てて、もうすぐ（結婚して）10年なるからこれで落ち着くかなーって思ったんだけど、一緒にいて苦労するくらいなら1人のほうがいいと思って、家も捨てて、10万円だけ持って。最初お風呂のない部屋で住んで。（老年層・女性）

和人の1名について、離婚の理由については不明だが、夫は結婚当初は熊彫りだったが、夫の病気などで生活が厳しくなり、職を変えた。夫との結婚生活のなかではアイヌの人たちとの交流もあり、「お金を貸したこともある」という経験をもっている。夫は離婚後に亡くなっているが、アイヌの人たちとの交流は維持されている。

この3人について、今回のインタビューのなかでは、離婚に関してアイヌであることを理由とするような発言は確認されなかった。

### 第4節 子ども世代への告知

本調査の対象者はすべて結婚の経験をしている。子どもがいる者は、14人中13人とほとんどの者が子どもをもっている。では自分の子ども世代に対して、アイヌ民族の1人であることを伝えているのか。さらには、アイヌ文化を伝えるような経験をしているのだろうか。これらについて、自分自身の経験と子どもへの告知について整理してみた。

#### 第1項 アイヌであることの認識

子ども自身がアイヌであることを知っているか否かという質問では、13人すべての子どもが「知っている」という。

これまでの道内の調査では、アイヌであることを「子どもは知らない」という者も散見されたが、本調査ではいなかった。また、子どもにアイヌであることを伝えたとする中には、祖母がアイヌの踊りなどのイベントに同行する経験をしているために、伝えたとする者や、子どもからの

質問に答える形でアイヌの血筋であることを伝えている。

- ・もう普通に（伝えている）。だって、母がやっぱりもう。あちこちのイベントに呼ばれる時に息子が小さかったから連れて行ったり、東京にも行った時も息子も一緒に行っているし。息子も輪踊りの中に加わって…（後略）。（壮年層・女性）
- ・子どもには小学校の時に「アイヌって何」と聞かれて、夫がアイヌであることを話していたよう。（老年層・女性）
- ・息子がね、いきなりさ、「お父さん」って言うから「何よ」ったら、「オレってアイヌの血入ってるんだよね」って言うんだ。「入ってるよ」（って答えた）。（老年層・男性）

また、上記のように、明確に伝えていないとしても、子どもの様子から「わかっているはず」という者がもっとも多かった。

- ・そういう話はしたことはないのだけど、うちの息子がやっぱり小学校3、4年生くらいの時に、そういうアイヌの勉強するんですけど、うちの息子は反対に「ばあちゃんうちにこんなものもあるよ」みたいな感じで、先生のほうからKくんから聞いたんですけど、って言って、なんか持って行ったんですね。学校にね。うちの息子は何か全然ね、何かもう喜んで話したって言われて。うちのばあちゃんもね、小学校にアイヌの料理を教えに行ったり、教育委員会から頼まれて何回か行っているんですよね。そしたら、先生も喜んでくれていて、だからうちの娘も息子もアイヌだからどうしたら、こうしたらという気持ちはないと思います。（壮年層・女性）
- ・私が仕事しているそばにいるから。あの人の場合。いつわかっているんだろうね。自然とわかったんでないの。中略…父親もうちへ持ってきて熊仕上げる。私は私でちがうことやっているし、自然とわかってたんじゃない。で、じいさん、私のほうの父親が小学校上がる前までいたから、「じじ、じじ」とそばにいる子だったから。（老年層・女性）
- ・言わなくてもあの子はわかっているみたいだったよ。そして、自分から言って歩いていた、あの子。小学校の時。「うちのばあちゃんの家くさいけど来い。」とか言ってやっていたよ。だからほら、何でも乾かしたりなんかしているでしょ。野菜でも何でも、家の中に。（老年層・女性）
- ・だから、あの一、うちらはね、あの一、行事やるでしょ。その子どもたちも一緒に保育園や小学校の時、一緒に来て着いて、で、行事にね、ウロチョロして参加してるから。それで自然と分かるでしょ。子どもの頃から踊りをね、踊ってくれたりね。（老年層・男性）

## 第2項 自分自身の経験と子どもへの告知

このような子どもの状況を、対象者自らの経験を重ねてみたのが表3-11である。こうしてみると、和人の2名は、アイヌの文化に触れた経験はまったくないようだが、それ以外のアイヌの人たちは、ほとんどがアイヌの文化や行事の経験をもっていることがわかる<sup>6)</sup>。

先にみたように、子どもへははっきりと伝えなくても「わかる」「知っている」根拠として、家

での生活や、家業としての熊彫り、アイヌの行事などに触れることがある。それは自分自身の子どもの頃の経験との何かしらのつながりがあるのではないだろうか。なぜなら今回の対象者は、現在もアイヌの行事や伝統文化に関わりをもつ者が多かったからである。幼い頃に、アイヌ語やアイヌの伝統文化が身近にあったことが、現在まで途切れることなく続いている一つの要因と見ることができ、そしてそれを支えるものとして、アイヌの伝統工芸や保存会、記念館があるのではないだろうか。

つまり家庭内の子どもへの文化継承も、家族のなかだけでできるものではなく、それを維持する枠組みがあることで、存続することができると考えられる。

表3-11 自身の経験と子どもへの告知

| 自分自身の経験                                                                                                               | 子どもへの告知                                                                                                                                 |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| アイヌ語をしゃべっていましたね。フチたちが集まったらみんな、そうやってしゃべったり、歌ったり、なんかしていたり、やっているのは見てましたね。                                                | 自然と。父親もうちへ持ってきて熊仕上げる。私は私でちがうことやっているし、自然とわかっていたんじゃない。で、じいさん、私のほうの父親が小学校上がる前までいたから、「じじ、じじ」とそばにいる子だったから。                                   |
| 祖母は同じ年齢の人たちとアイヌ語で話をしていた。入れ墨をしているおばあさんや周りに熊を飼っている人がいた。                                                                 | 夫が伝えていた（子どもに聞かれて）。                                                                                                                      |
| うちの母親が木彫りをやっていたり、箸を作っていたり、内職でやってただけですね。母親の兄弟ももう亡くなっていて、うちのお母さんしかいないんだけど、お兄さんはね、それこそ熊とか彫っていましたね。伯父は熊を彫って、それで生活していましたね。 | 娘や息子に話したことはない。息子が学校でアイヌの勉強をした時に、（喜んで話した）。うちの息子は反対に「俺アイヌでよかったな」とか言いますよ。                                                                  |
| アイヌ文化に触れることはまったくなかった。                                                                                                 | いや、教えなくてもおのずから覚えたからね。自然にわかった（行事などで）。                                                                                                    |
| 昔はまわりにアイヌの人がたくさん住んでいた。年寄で入れ墨をしている人がたくさんいた。熊も飼っていた。                                                                    | 言わなくてもあの子はわかっているみたいだったよ。そして、自分から言って歩いていた、あの子。小学校の時。「うちのばあちゃんの家くさいけど来い。」とか言ってやってたよ。だからほら、何でも乾かしたりなんかしているでしょ。野菜でも何でも、家の中に。                |
| 生まれた時から、アイヌの行事に参加していたが、アイヌだとは気づかなかった。                                                                                 | 知っている。一緒に活動しているから。                                                                                                                      |
| アイヌ文化を見聞きしたことはなかった。                                                                                                   | うん、知ってる、知ってる、小さい時から。そして、うん、アイヌの人たちともうまく…（付き合っている）なんかあるったらもう必ず連れてったから。そして、そういう恰好もさせたから。うん、その頃は別になんも。                                     |
| カムイノミのようなことはしていた。夫婦喧嘩はアイヌ語をつかってた。祖母は入れ墨をしていた。母親は内職で熊彫りをしていた。                                                          | 中学校あたりに、一番最初聞かれたのは記念館で、〇〇たちが中学回るっしょ。（それを契機に）「オレってアイヌの血入ってるんだよね。」って言うんだ。「入ってるよ。なんですよ。」ったら、「いやー」つってさ。                                     |
| まあ生まれてからずっと、赤ちゃん時からおぶさって、生まれて。それで子守の踊りとか舞台上立って歌うたっただけおひねり貰って。                                                         | 子ども…、もう子ども達は。孫はアイヌのことにすごく興味があって、「ばあちゃん行きたい」とか、「カムイコタン祭り行きたい」とかって、また日にちをちゃんと覚えて、「今年はどうなの」って毎年孫に言われて。                                     |
| 小学校3年生ですか。（アイヌであることを知った）うんと、アイヌ記念館で、その熊のなんだ…クマ送り。                                                                     | 言ってますね。やっぱ小学校ですね。まあ無いですね。ちょっとやっぱりアイヌの血で、ちょっと毛深いんですよ、女の子が。それぐらいがちょっと嫌。それぐらいかな。                                                           |
| それは、うちの母というのはアイヌ記念館のほうでお店を出していたので、だから私は産まれたときから、もう子どもの頃からその環境にいたので、だから踊りも歌も全部できますし。                                   | （子どもにアイヌであることを伝えている）もう普通に。だって、母がやっぱりもう。あちこちのイベントに呼ばれるときに息子が小さかったから連れていったり、東京にも行った時も息子も一緒に行っているし。息子も和踊りの中に加わって。何か息子も生まれたときからそうなんだという感じで。 |
| いやそれはね、ずっと、まあ周りがみんなそうだからね。周りにいっぱい居たら、それは分かるよ。中略…ばあちゃん、入れ墨はしてるね。耳輪もしてるしょ。                                              | うん、知ってる。だから、あの一、うちらはね、あの一、行事やるでしょ。その子どもたちも一緒に保育園や小学校の時、一緒に来て着いて、で、行事にね、ウロチョロして参加してるから。それで自然と分かるでしょ。子どもの頃から踊りをね、踊ってくれたりね。                |
| いやー、今でも言う。私、アイヌかも知れないけど、アイヌでない、知らないって言うから。したら、アイヌアイヌの顔しててそんなこと言ったら変だよってちゅうって言われたことあるけど。                               | 案外、本人分かっててね、うん、そしたら、「おまえのお父さんアイヌだろう」って言ったちゅうからね、「何、そんなこと言うなら連れて来い！」って、「アイヌの〇〇」って怒ったの（笑）。                                                |

## 第5節 アイヌ家族における和人

和人でありながら、アイヌ民族の1人として生活している場合には、「和人配偶者」である場合と、「和人養子」としてアイヌに育てられる場合がある。今回の調査においても、3名の和人配偶者がインタビューに応じてくれている。「和人養子」の者はいなかったが、親が和人養子だったとする者の話を聞くことができた。

### 第1項 和人配偶者との出会い

インタビューにおいて、和人配偶者は男性1名、女性2名の3名であった。小野寺理佳は、和人がアイヌとの結婚を促す和人の生活状況として、①アイヌと地理的に近いところで生活していた、②教育水準や就労状況がアイヌの人々と共通していることを指摘している（小野寺 2012）。

今回の場合には、3人ともこれまでの生活のなかで、アイヌやアイヌ文化に触れたことはまったくなかったという。ではそのような彼らが、どの様ないきさつで対象者と出会ったのだろうか。

この3名が出会い結婚に至る段階で、相手がアイヌであることを意識したことはなく、かつ、結婚に際してアイヌ民族であることで困難はなかったという。出会いの契機を見ると、「民芸品店」「アイヌ記念館」などである。

- ・旅行先の民芸品店で、彫刻を介して知り合った。
- ・旭川で働いている時に知り合った<sup>7)</sup>。
- ・記念館を辞める時に知り合った。相手から電話がかかってきて付き合うようになり、結婚した。

「彫刻を介して知り合った」というのは、対象者が彫刻に対して関心を抱く中で、その関係者として出会っている。また「記念館を辞める時に知り合った」という者も、木彫りなどの民芸品が好きで、ある記念館に弟子入りしたことが一つの契機となっている<sup>8)</sup>。この2人に共通するのは、アイヌ文化に対する好意である。

そのこともあってか、相手がアイヌであることを考慮して悩んだり、周囲が結婚を反対することもしなかったという。ただし、アイヌであることについて、噂されたり、親族から心配されたことはあったようだ。

- ・うん。なかったよ。なかったけれど、やっぱりある友だちからは、職場でもあの人はアイヌの女の人と一緒にいるとはね。
- ・いや、母も兄弟たちも「いや、アナタがいいんだら、しょうがないね。」って言って。だからとくにダメとか、もう絶対っていうのは無かったね。まあ心配はあったと思う、うん。
- ・気にしたことはない。

### 第2項 アイヌ社会に入って

現在、この3名は和人でありながらアイヌ社会との関わりを継続しており、中にはアイヌ文化継承の重要な役割を担っている者もいる。

- ・（チセの制作は）昔のエカシに教わった。その方に付いたのさ。それははやく言うと弟子入りだわね。弟子入りみたいにしてもう、ついて歩いたのさ。中略…アイヌの人と仲良くするまで、それ、アイヌの人に溶け込んでいくまでにはね、やっぱり年月かかったわね。だからその同じチセを習うにしても1回や2回で覚えなかったら「このシャモ」とかって言われることもあるんですよ。逆に、頭の悪い奴だな。覚えの悪いやつだな。と言われるんですよ。だから今自分で教える時はそういうことは言わないでね、もう1回や2回で覚えるわけないから。やっぱり現実そのものに携わらなかったら覚えられないから。
- ・結婚してから、うーんと、そのね、私はウタリって呼んでたのね。中略…（差別されるのは）家庭環境だと私は思う。あの一、要するに着るものとか、そういうことで差別をされたのが兄弟、うん。だから私の子どもたちは、そういうことは一切無かったの。ただし、娘は毛深かった、うん。それこそ保育園行っても、「○○ちゃん 毛深いね」って言われて、その頃から脱色してやった、わたしが。だけど、それ以後別に。そして自分の娘たちはそうやって舞台の関係ですずっと行くでしょ、地方、地方。そして、踊りなんかを踊りますよね。そしたら、その時も別に何にも言われなかった。
- ・料理したことあるし、イヨマンテも2回くらい行ったことあるかな。カムイノミもやってる。ああ、これはもう自分ん家でしてる。中略…葬儀っていうのは、ウタリ墓地あるからね。そこでやってるからね。アイヌ語はちょっと分からないけども、歌と踊りもしてるし、工芸もしてる。そのぐらいかな。中略…○ちゃん。あの人やるから。あの方はムックリもやるし、色んなのやるから、うん、それで。

このように、3人とも現在はアイヌ社会に信頼を得ており、その背景にはアイヌ社会への案内人の存在がある。しかしそこに至るまでには、和人でもなくアイヌでもないというダブル・アウトサイダー<sup>9)</sup>（小野寺 2012）としての厳しい経験も少なからずみられるのである。

### 第3項 和人養子

インタビューの中では、和人養子の存在について話をする者が、老年層に2名、壮年層に1名あった。本人が和人養子ではないが、父親など上の世代が和人養子だったというものである。老年層は父親が和人養子だったとするもの、壮年層の1名は祖父が和人養子だったとするものである。

- ・だから、よけい父親だから、アイヌって感じがしないの。アイヌは毛深いっていうか、すごいでしょ。うちの父親はまるっきりない人だから。そして、すごいおしゃれな人だったから。うん。和人だったから。だから全然わからないとか。（老年層・女性）
- ・うちの親父はね、そういうとこあんまし行きたがらないんだよね。やっぱり、ほんと、親父の年代、その当時だったらアイヌ部落に居るから、周りの人にはアイヌ（と言われ）。かと言って、部落の人には「もらいっ子」って（言われた）。（笑）両方バカにされてる訳でしょ。親父、一番大変だったと思う。中略…昔、たとえば、うちの親父が生まれた頃は、開

拓失敗した人ね、自分らが食えないから、アイヌ部落へ連れていけば、子ども大事に育ててくれるよーっちゅう感じで、親父は、だからここふたりもアイヌなのね。だから旭川にね、こうやって何十も中略…そういう人がね何人…そうだし、たまたま何軒かそういう境遇の人、いますよ。和人で入ってきて、そういうアイヌの人に育てられて。だから、なんちゅうんだ、うんそうだね、〇〇さんもそう。だからそういう人らとは親父もね、やっぱり境遇同じだから仲良くなるからね、子どもとしてくつついて歩いて、「ああ、ここん家」っちゅうのあるから、そういうのは。(大正の初めに生まれたようだが体が弱かったため2〜3歳になってから籍を入れた) (老年層・男性)

- ・じいちゃんが結局、(結婚に)反対されてアイヌの人に預けられた。それが〇〇なんですけど。預けた人、預け先、それが〇〇。一応有名。アイヌのなかでは有名なんですよ。要するに、裕福なアイヌのところに入れたんでしょうね。その当時は裕福だったらしいから、〇〇さん。うちの弟がいろいろ〇〇さん調べて、まあ血はつながっていないけれども、三重県の方で何かいろいろな布教活動など、キリスト教なんで、クリスチャンだったんで。布教活動とかしたりして。それが三重県で、何か知らないけど三重県に縁があるんですよ。そういう意味でね。

(アイヌが和人養子を取りたいと思ったのか) ということではなくて、それはちゃんと調べたらわかると思うんですけど、アイヌの人たちはやっぱり心が優しいから、子どもはその宝ものという感じで。そういう形で受け入れたみたいですね。お金がほしいとかじゃなくって、だってそこ〇〇家は裕福だったから。お手伝い何人も使っていたところにくれたんだから。そんなお金がほしくてもらったわけではないと思います。(壮年層・女性)

このようにアイヌ養子に関しては、子どもが親の経験を語るという間接的なものであったが、この地域に、一定数の和人養子がいたことや、親が和人養子であったことは、子どもの側からみても難しい立場にあることを感じるものであったことが述べられていた。

また、アイヌが和人の子どもを養子にしたことについては、決して金銭的な目的ではなく、アイヌのなかでも比較的裕福な家庭であったことや、アイヌの愛情深さが北海道開拓で厳しい生活を余儀なくされた和人を助ける意味があったのではないかと述べていた。

## まとめ

本稿では旭川におけるアイヌの家族について、自らが育った家族、自分自身が親として育つ家族、そしてその間にある結婚に着目しながらみてきた。このインタビューを通して得られた旭川のアイヌの家族の一端について、その特徴を述べるとすれば以下のことがいえる。

1つ目に、熊彫りを中心としたアイヌ工芸に関わる人が多く、それが家族の生活に影響を与えていたことである。たとえば子どもが育つ段階でも家業の手伝いや、成長し売店の手伝いを通して結婚への契機になっていることもあった。何よりも子どもに対してアイヌの文化が身近にあることに繋がっていた。これは旭川が、北海道内のなかでも木彫り熊の盛んな地域であったことに由来しているのだろう。

2つ目として、「アイヌ記念館」の存在がある。これまでの調査においても、アイヌの人々が

集うことができる場やイベントなどが影響を与えてきたことがあったが、旭川では「アイヌ記念館」の存在がそれにあたる。とくにアイヌ観光が盛んだった頃は、記念館があることでアイヌ舞踊を披露したり、工芸品の販売など、アイヌの文化を維持するのに加え経済的な支えになっていたことがある。現在ではその機能は少なくなっているが、文化継承の機能は引き続き維持していると見ることができる。

3つ目として、今回の対象者に限って言えば、アイヌであることによる、結婚や子育ての難しさはそれほど大きくなかった。アイヌ文化の豊かな経験は、時として厳しい経験と対であることが多いなかで、今回は結婚や子育てに関する厳しい経験は多くはなかった。もちろん、詳細に見れば和人では経験することのない経験はしていると思われるが、これまでの生活を振り返ったなかでは中心的な話とはなっていなかった。

4つ目に子ども世代に対してである。ほとんどの者が子どもにアイヌであることを伝えたり、それを知る機会を与えており、子ども自身もアイヌであることを前向きに捉えていることがある。アイヌ文化の担い手が減少しているといわれるなかで今後も期待される。ただし、日常的なアイヌの儀式などを子どもに伝えているとするのはほとんどみられず、その点では他の地域と同様であった。

最後にアイヌと和人の関係では、和人配偶者はアイヌと結婚したのち、アイヌ社会でアイヌ文化継承の担い手として重要な役割を担っている者もみられた。また離別したのちもアイヌ社会との交流を続けている者もあった。アイヌ養子については、本人ではなく子どもからの話であるが、旭川には北海道開拓で厳しい生活を強いられてきた和人の子どもを養子にするという趣旨で複数のアイヌ養子が存在していたことが分かった。

#### 注

- 1) 本調査では、親子やきょうだいなどの親族関係にある対象者が含まれている。具体的には親子が2組、親と2人の子が1組、叔母と子が1組である。この者たちを合わせると4家族（親族）9名となる。対象者の中に、親子やきょうだいが含まれている場合、アイヌの血筋や家庭におけるアイヌ文化の経験等に影響を与えると考えられることに留意が必要である。
- 2) 両親はアイヌだがその上の世代の血筋は不明、配偶者の父母祖父母はすべてアイヌであるとするものが1名いた。
- 3) 本調査では14名の対象者がいるが、そのなかには、3組の親子と1組の3親等内の親族が含まれているため、文化の経験としては9つの家族を対象としているといえる。
- 4) 「木彫り熊」は、20世紀初頭に八雲、旭川を起源とする2つの系統により道内木工家らに伝わったものと言われている。旭川は道内のなかでも木彫り熊が盛んな地域であるとみることができる。木彫り熊の名人とされていた藤戸竹夫の息子で彫刻家の藤戸竹喜によれば、旭川の熊彫り職人は、鮭を喰えた“食い熊”、後ろ足で立ち上がった“立ち熊”といった、変わり熊と呼ばれるものを考案していったという（「木彫りの熊でアイヌ文化を伝承」『サライ』2018年1月号）。
- 5) ここでいう記念館は、川村カ子トアイヌ記念館である。この記念館はアイヌの旧家として知られる川村家第8代川村カ子ト（かねと）が、生前アイヌ民族文化の正しい伝承を目的として、私財を投じアイヌ文化を後世に伝えるために作った現存する唯一の私立のアイヌ資料館である。詳しくは第1章参照。
- 6) 表の最後の対象者は、樺太で生まれたため、近くにアイヌがいなかった。終戦後17歳の時に樺太から引き揚げ北海道に渡った。その後は親の計らいで様々な地域に奉公に出され、その後見合いをして結婚した。結婚相手はアイヌであり居住した地域はアイヌが多く住む地域だったため、アイヌの文化に触れたのは結婚後であった。

- 7) この和人女性が配偶者と出会ったのは、旭川で洋裁の仕事をしている頃であることは確認できるが、出会いのきっかけなどについては、不明である。
- 8) ここでいう記念館は当時アイヌ部落に存在していた川上記念館のことで、川村カ子ト記念館とは別の施設である。
- 9) ダブル・アウトサイダーとは、和人配偶者がアイヌ社会においては和人として退けられ、和人社会においてはアイヌの側の人間として退けられることをいう。

#### 参考文献

- 旭川市生涯学習部生涯学習課文化振興係, 2003,「旭川におけるアイヌ文化の歴史と現在」『旭川市アイヌ文化振興基本計画』, 26-30.
- 北海道環境生活部, 2017,『北海道アイヌ生活実態調査報告書』, 15.
- 小野寺理佳, 2012,「アイヌ社会における和人のアイヌ性—和人妻と和人夫」小内透編著『北海道アイヌ民族生活実態調査報告書 その2 現代アイヌの生活の歩みと意識の変容—2009年北海道アイヌ民族生活調査報告書』北海道大学アイヌ・先住民研究センター, 123-42.
- 品川ひろみ, 2018,「アイヌの家族形成と展開」小内透編著『現代アイヌの生活と地域住民』東信堂, 51-81.
- 上山浩次郎, 2018,「アイヌ文化の実践と内容」小内透編著『現代アイヌの生活と地域住民』（先住民族の社会学第2巻）東信堂, 114-37.

#### インターネット資料

- 公益財団法人北海道アイヌ協会ホームページ  
<https://www.ainu-assn.or.jp/member/index.html>
- 一般財団法人旭川コンベンション協会  
<https://www.atca.jp/>
- インタビュー藤戸竹喜さん「木彫りの熊でアイヌ文化を伝承」『サライ』本誌2018年1月号.  
<https://serai.jp/hobby/293328/3>

(品川ひろみ)

